

1. 旧約聖書の「五書」

旧約聖書の原典は普通マソラ本文と呼ばれます。それは、恐らく紀元五世紀頃から数世紀間にわたって活躍したマソラ(伝承)学派といわれる学者たちの働きに負うもので、彼らの仕事の総合的な結果が今日の旧約聖書の本文となって伝えられているのです。

その構成は、「律法」「預言者」「諸書」の三部に分けられていて、すでに紀元前二世紀のシラ書の冒頭にも「律法の書と預言者の書および後に書かれた他の書物」という表現が使われています。「律法」と呼ばれているのは創世記から申命記までを指し、元来はこの五巻を包括した「一巻の聖なる書」として理解されたものと思われまます。やがて時代が下って二世紀頃からこれをギリシア語で「五書」と呼ぶようになり、それがラテン語にも波及します。このように、旧約聖書の最初の五巻を一つの区分とすることは、ユダヤ教の伝統によるのであって、ギリシア語訳聖書(LXX)もこの区分に従っています。

これとは別に、旧約神学の世界では 18 世紀以来、ヨシュア記を加えて「六書」と呼ぶ学者たちが現れました。それはこの六書が一つの文学的まとまりをなすという理解によるもので、これはあくまでも近代の批評学者が作った学術語です。

それではこの五書は、どのような構成になっているのでしょうか。まず、五書の結びである申命記 34 章を見ると、神がかねて民に約束しておられた土地を、ピスガの山頂からモーセに見渡せるようにされたことが書かれています。

「主はモーセに、すべての土地が見渡せるようにされた。……主はモーセに言われた。“これがその土地である”。」(申 34:1-4)

死に先立ってモーセに語られたこの言葉によって、かつて出エジプト記で約束された主の計画が完了するのです。

「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫びを聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々とした素晴らしい土地、乳と蜜の流れる……所へ彼らを導き上る。」(出 3:7-8)

この約束から成就に至る歴史が出エジプト記から始まっていることから分かるように、創世記はその前史の位置を占めているのです。先ほどの引用で省略した 申 34:4 の言葉は、「これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である」となっていて、実はその約束がすでに族長の時代に起源するものと理解されています。つまり族長たちの物語り(創 12～50 章)全体が、アブラハムと共に始まるこの約束によって貫かれているのです。

「主はアブラムに言われた。“あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。”」(創 12:1)

しかし、この前史としての族長物語りではその約束は、申命記 34 章で計画が完了しているよりも、さらにもっと広い展望の中に置かれています。アブラムへの語りかけは、「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」(創 12:3)という言葉で終わっているのです。

この広範な広がりをもつ約束は、創世記 1～11 章の、いわゆる「原初史」を背景においてのみ、初めて正しく理解することが出来ます。このことについて、次節以降でやや詳しく取り上げたいと思います。

このように五書は、現在の形では、一つのまとまった連続的な物語りになっていますが、それはイスラエルに口伝や記述伝承として伝えられ、長い年月の間に成長をとげることによってまとめられた、それも互いに多様な独立したいくつかの集成(学問的には資料と呼んでいる)に基づいて、編集によって成立するに至ったものなのです。そして、そのような五書を成立させた根本的な動因が、イスラエルの祭における信仰宣言であったことはすでに述べたとおりです。^{※1} 用いられている資料、JとEとPについても、私はすでに以前に簡単に述べました。^{※2}

※1 聖書講義 2015-1 6. 朗誦の神学と典礼 参照

※2 聖書講義 2015-2 12. 旧約聖書の編集史 参照

2. 原初史(原始の物語り)

創世記1～11章は一般に、“原初史”と呼ばれています。しかし、これを内容に即して正しく呼ぶとすれば、神学的な“原始の物語り”であって、決してイスラエルの信仰(従って当然キリスト教信仰も)がそこから始まった歴史の出発点ではないということを、念頭に入れておく必要があります。

これらの物語りを記述したイスラエル人たちは、信仰の人でありました。彼らは、イスラエルをその民とした神の光に照らして、歴史の主が世界の主であり創造者であるという信仰を宣言し、神の民の歴史をより広い地平に位置づけるために、この“原始の物語り”を五書の冒頭に、その序説として置いたのです。

神の天地創造について包括的に述べている唯一のテキストが、創1:1～2:4aだけであるということは、注目に値する事実です。それはP資料という捕囚時代以後の作品に属しています。もちろんそれは、イスラエルがそれ以前の時代に、神を世界の創造者として崇拜することを全く知らなかったという意味ではありません。むしろ、イスラエルの民が誕生し歩んで来た古代近東世界は、創造神話の宗教的雰囲気満ちていましたから、それらと接触を持ち影響を受ける機会があったと考える方が自然なことです。

しかし、最終的に五書の編集が完成したとき、このテキストがその冒頭に置かれるに至ったのは、Pの神学によることであります。それは、創造を神の救済の業の初めとして理解するという神学です。つまり、救済史に対するイスラエルの信仰の表明の一部として(もはや神話としてではなく)、天地創造の由来はここに位置づけられました。

このような創造の救済論的理解を、私たちは第二イザヤにおいて、また詩編においても見ることが出来ます(イザ42:5, 43:1, 44:24, 51:9-16他、詩74:12-17, 77:17-20, 89:1-13他)。しかしその場合には、神の救済の御業を述べるための言及としてであって、創造そのものが本来の主題になっているわけではありません。

つづくJ資料の、(天地の創造については何も言及していない)もう一つの創造物語りに目を転じると、私たちはそこで、全く異なる思考様式でなされた叙述に出会います(創2:4b-25)。それはPよりもはるかに古い資料であって、しかも非常に古い神話的素材や表象を用いて描かれています。それはあくまでも外見上のことであって、私たちはJ資料の深く神学的な洞察を見誤ってはなりません。それはすでに古代の神話とは遠く隔たった神学的な物語りであって、精神的に、より自由な比喩として、冷静に素材を扱って、神の救済史の開始を語っているのです。

以上二つの物語りは、方法は全く異なっていますが、一つ的一致点を持っています。それは両者とも人間の創造、すなわち男と女としての人間の創造を頂点としており、この神の最高の業としての人間に向かって、他のすべての創造が秩序づけられているということです。Jにおいては人間を中心にして、その周りに神はその業を配置しており、Pにおいては、人間は宇宙論的なピラミッドの頂点に立っており、直接に神と相対しています。

しかし正にこの一致点は、旧約聖書全体から見ると神学的に極めて高度なものであって、他のところではその余韻を見出し得ないほどに孤立しているのです。つまり古代近東の世界で一般化していた、宇宙論的・二元論に基づく神話の様式や素材が、旧約聖書の他の箇所ではしばしば用いられているからです。私たちはしっかりと神学的検討なしに、それらすべてを安易に同列に扱ってはなりません。

“原初史”は、それだけで孤立した物語りではなくて、それにアブラハムの選びに始まる歴史が続きます。それは遠大な神学的な結論を持っているのです。Pの大きな系図的な構成である“トーレドート”^{※3}の中に置かれた天地創造の物語り自体が、すでに一日一日正確に区切られた歴史の一部なのです。

※3 日本語では「由来」、あるいは「系図」と翻訳されている。創2:4, 5:1, 10:1, 11:10,27。

3. 人間の創造

先ず、Pの物語りから人間の創造に関する部分を取り上げます。それは他の被造物の場合のように、言葉によって創造されたものではありませんでした。それは神の特別な決断によることでありました。

「神(エローヒーム)は言われた。“我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。……” 神は御自分にかたどって人を創造された。…… 男と女に創造された。」(創 1:26-27)

この「我々にかたどり」(v.26)「神にかたどって」(v.27)は、旧約聖書の理解では“神自身とそれを取り巻く多数の天的な存在”(王上 22:19 参照)を指していると理解しなければなりません。つまり人間が持つ“神の似姿”とは、唯一の神のみに直接結びついているのではないのです。

詩 8:6で「神(エローヒーム)に僅かに劣るものとして人を造り」と歌われている場合、本来主(ヤーウエ)への賛歌であるこの詩がここでわざわざエローヒームを持ち出して、「人間はエローヒームのような形に造られた」と述べているのです。ギリシア語訳聖書(LXX)は、すでにこのエローヒームをアングロイ(天の使いたち)と翻訳しています。

旧約聖書全体を通して、神はしばしば擬人化して描かれており、あたかもイスラエルが神を人間の姿をしたものと考えていたように見えます。しかしそれは考え方の方向としては正しくないのです。なぜならイスラエルの信仰においては逆に、人間が神に似せて造られた(創 5:1)と理解したからです。神の姿は、人間がそれに似せて造られた元像のように見えたのです(エゼ 1:26)。

Pはこの“神の似姿”の目的、すなわち神から人間に委ねられた機能について、次のように述べています。「地を従わせよ。…… すべて(を)支配せよ。」(創 1:28) 神はご自分の支配権を維持し貫徹するために、人間を自らの委任者として世界の中に置かれました。動物だけではなく、世界を支配するという権能は、ただ神から与えられただけではなく、同時に、神に向かっての特別な責任を果たすという課題を人間に付与したのです。

次にJの創造(楽園)物語り(創 2:4b-25)へ進むと、それは非常に身近で具体的な人間中心的とも言える叙述になっています。原初の状態は水のない荒地であって(創 2:5)、主(ヤーウエ)は水を与えることによって好意を示し、荒地をオアシス、耕作地に変えるのです。人間を絶え間なく配慮し、彼の回りに園を設け、彼に役立つことは何でも考えてやろうとするヤーウエの好意で、物語りは進んでいきます。「この木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」(創 2:17)という禁止も、神の配慮ある心情からの言葉なのです。

「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(創 2:7)

この叙述に、私たちはJの深い神学的理解を見出します。人間はただあの神の息によってのみ生命を持つに過ぎない。しかもこの息は決して、彼の肉体に内在するものではないのである。「息吹を取り上げられれば彼らは息絶え、元の塵に戻る」のです(詩 104:29)。

ここで、P資料とJ資料が、時代を異にする全く独立した神学に基づく作品であるにもかかわらず、その用いている伝承素材の理解に関して、ある依存関係を有していることを付言しておきたいと思います。五書は多くの資料を寄せ集めることによって編集されましたが、その際に不都合な伝承理解を改変したり無視するようなことを、(全くなかったとは言えないまでも)積極的には行いませんでした。むしろ、一方の資料の伝承理解が他方の資料における解釈に影響を与えた可能性も、十分に考えられるのです。

そのような例をあげると……

創 6:9(P)「ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった。」

創 7:1(J)「あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人であるとわたしは認めたからである。」

この他にも、創 17:21(P)と創 18:14(J)なども、注目に値する箇所です。

4. 罪の侵入とその増大

J資料が創3～11章において述べる墮罪物語りは、旧約聖書全体の中でも特異なものです。というのは、この物語りを知っているか少なくとも参照しているような記述は、旧約聖書の他のどこにも見当たらないからです。

創1～3章におけるJ資料とP資料^{※4}の観点の違いについて、私は19世紀最大の旧約学者ウェルハウゼンが「イスラエル史序論」(通称“プロレコメナ”と呼ばれている)の中で行った分析の要点を、紹介してみたいと思います。

人がエデンの園から追い出されることになった“善悪を知る”知識とは何であろうか。古来それは道徳的知識、すなわち良心のことであると解釈されて来た。しかしそれは元来は有益であるか害があるかという意味であって、道徳的判断による行為を意味してはいない。ヘブライ語の“善悪”という単語には冠詞が付いていないのである。

Jの物語りにおいては人は“知識の木”で象徴される天地の隔された知識を知ることが禁じられていたのに対し、Pの物語りでは人が天地のすべてを支配することは最初から与えられた課題であった。この支配することと知識とは同じであって、それらは文化を意味している。前者にとっては自然は聖なる神秘であり、後者にとってはただの客観的な事実ないし対象なのである。前者においては人が善悪を知ろうとすることは神のものを奪うことであるのに対して、後者においては人は神の代理者として自然を支配する者として先ず神にかたどって創造されている。

この対立は偶然のものではなくて、時代的に先立つJの原初史の理解に対して、Pが彼の時代の神学的立場から行った抗議であるように見える。ただしそれは資料の年代的前後関係に関する話であって、両者ともイスラエルのそんなに古くからの伝承ではなく、少なくともソロモンの時代よりも後の資料である。

実に見事な論証であって、私たちはこれを予備知識として、さらに学びを深めて行きましょう。

J資料は人類の原初史を、理想的な神関係が劇的な状況において壊されて行くという視点で描いています。それは神学的な考察であって、古めかしい神話的思考とは対極をなしています。エデンの園で人間は神の命令に逆らい、自ら神のようになろうとしたことによって、神に対する服従という素朴さから抜け出てしまい、楽園における生活を棒にふるったのです。そこでは罪は人間的なもの、とくに心理的なものとして、さらには身体的現象としてさえ叙述されています。人は恥じることを知り、神を恐れてその顔を避けることを覚えます。そして最後に、人間の生活状況の本質的な不条理こそが、主が与えた裁きであることを読者に理解させようとしています。人間は土の塵で造られましたが、それはそこから生ずる産物と共に彼の生活の基盤なのです。ところが人間と耕作地との関係に一つの破れが生じました。大地は呪われるものとなり、今や耕作地は人間がその産物を苦勞せずには収穫することを拒否します。ウェルハウゼンはこれを次のように表現しています。

Jにおいては、原初史に用いられた神話的素材が、独特の陰鬱な深刻さ、一種の悲観論的な古代哲学で彩られていて、あたかも人類は罪というよりもむしろ被造物であることの重圧の下でうめいているのである。

イスラエルの歴史的伝承の神学として旧約神学を叙述した20世紀の研究者フォン・ラート(1901-1971)は、神がアダムと女に皮の衣を作って着せたことを、“神自身が人間の恥を覆い、この覆いによって彼らの相互性に新しい可能性を与え、人間の文化の基本要素を定めた”と理解しました。創4章のカインの物語りが示しているのは、牧畜と農業というふうに生活の仕方が分裂し、異なる文化史が生まれて行った先には武器の製造があったということです。この発見が人間を直ちに悪へと誘ったと、J資料は説明しました(創4:22-24)。人間の文化が徐々に発展し、大きく強くなって行く歴史現象の最後に、バベルの塔建設の物語り^{※5}が語られることによって、J資料の懐疑的姿勢は頂点に達します。なぜなら、この文化的に巨大な事業の中に、人間の神に対する攻撃を発見するからです。人間の恐るべき可能性に直面したときの古代人の恐怖を、J資料は同時代の人々に説明しようとしたのです。

※4 創1:1～2:4aはP資料、2:4b～4:26はJ資料である。

※5 創11:1-9はJ資料である。

5. 二つの神学の立場

P 資料は、人類の原初史をはるかに簡単に、もう一つの神学的視点で説明しています。^{※6} ここでは、罪の起源については何も語られず、「この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた」(創 6:11,13) というふうに、事実だけが述べられます。そして、それに対する神の行為と結果を厳密に神学的に凝縮して叙述するので。

大洪水は、神が創造の第二日に「水と水を分けた大空」が裂けた世界の破局として描かれ(創 7:11)、それが過ぎ去った後の時代を、被造物の共生が既に壊されているという前提で、純粋に神の恵みの意志によって保存される新たな秩序として説明します。このときから、動物が人間の食料として与えられるようになります(創 1:26 と 9:3 を比較)。人の命は神に属していますが、殺人への復讐は人間の手に委ねられます(創 9:6)。そのような世界秩序の保存を、神は契約を立てて誓うことによって、その後の救済史の展開へと世界を導かれるのです。

前講において私は、ウェルハウゼンが述べた“J の原初史理解に対する P の神学的立場からの抗議”という見方を紹介しておきました。しかしそれはある意味では、P が J の解釈を補ったというふうにも見ることが出来るのです。

J 資料において、人は土を耕す存在として創造されました。創 2:5 および 2:15 で“耕す”と訳されている語はアバドで、第二イザヤの有名な“主(わたしの)の僕”と語根が同じであって、本来は“仕える”という意味なのです。そして人が神の命令に反逆したとき、「お前のゆえに、土は呪われるものとなった」(創 3:17) のでした。

その結果 P は、神が大洪水によってその最初の創造の秩序を否定し(創 6:13)、世界は究極的な破局によって(創 7:11)いったん滅ぼされたと理解したのです。そこで創 5:1-32 の P の叙述の中に、ノアの誕生の箇所、「主の呪いを受けた大地で働く我々の手の苦勞を、この子は慰めてくれるであろう」(5:29) という J 資料からの断片が挿入されたと考えられます。

そして J の洪水物語りが「わたしはもう二度と人の故に土を呪わない」(8:21 / フランシスコ会訳) という言葉で終わった後に、P 資料は神による新しい祝福と契約を叙述するのです。「(私は、) …… 箱船から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。」(創 9:10) それは「わたしと大地の間に立てた契約」(9:13)「わたしとあなたならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約」(9:15-17) と説明されます。

P 資料にはアダムとノアを結ぶ系図(創 5 章)、ノアの三人の息子から地上の諸民族が広がった系図(創 10 章)、ノアの長子セムからアブラムに至る系図(創 11:10-27)があって、それにアブラムとロトを連れてカルデアのウルを出発し、ハランでその生涯を終えたテラの系図が付けられて、原初史と創 12 章との橋渡しになっています。

ですから原初史の最後は、人間の文化的活動が頂点に達し、そして失敗に終わるバベルの塔建設の物語りではなくて、むしろ創 12:1-3 のアブラムの召命の物語り(J 資料)であると考えべきなのです。実にイスラエルの救済史全体は、神の創造による諸民族の世界との関係の中で考察されねばならないという意味で、フォン・ラートは「原初史はイスラエルの一つの神学的原因物語りの最も本質的要素として理解されるべきである」と主張したのでした。

なぜ「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」(創 12:3) というアブラムの選びから始まる救済史が、個々の人間やその家族、そこから出てくる一民族(イスラエル)だけに関わるものではなくて、全世界的、全宇宙的な視野の中で理解されねばならぬかという理由を、原初史は提示しているからです。

※6 創 6:9-22、9:1-17 は P、7-8 章は J と P が入り交じっている。8:20-22 は J。